

90年代のNYにおける実験演劇の上演に関する資料収集 — Split Britches を中心に —	
佐藤 里野	比較社会文化学専攻
期間	2006年9月21日～2006年9月30日
場所	アメリカ合衆国 ニューヨーク
施設	ニューヨーク大学図書館、 ニューヨーク公共図書館

内容報告

今回の海外調査研究の対象は、80-90年代アメリカ実験演劇、特にジェンダー・セクシュアリティの観点からは代表的な存在といえるパフォーマンスのユニット、Split Britches である。Split Britches は、1980年代初めに、Louis Weaver、Peggy Shaw らによって結成された。彼女たちはもともとは、70年代のフェミニズムと連動し、Spiderwoman Theatre というカンパニーで活動を始めたが、80年代に入り、フェミニズム運動とマイノリティ運動が別々の方向性を探り始めたのと時を同じくして、「女」という大きなカテゴリーの中から、自分たちの関心事によりフォーカスし、レズビアン・セクシュアリティの表象を前提とした芸術実践を目的として Spiderwoman から事実上分離した。そのようにして立ち上げられたのが、Split Britches である。この調査の主たる目的は、彼女たち Split Britches の演劇実践の上演の実態を把握することであった。Split Britches の実践を知る上で、戯曲テキストに関しては出版されているものがあり、入手可能であった。その内容等の分析から、彼女たちがどのようなテーマに対していかなる手法を試みていたかということはある程度検証することは可能であった。一方で、彼女たちの活動が、いわゆるマイノリティ・シアターにおける上演という限定的なものであるということと、比較的年代が新しいものでもあることから、その上演と受容に関する実際的な資料を入手することは日本では非常に困難であった。しかし、レズビアン・セクシュアリティの表象という芸術実践において草分け的存在である彼女たちの実践は、演劇研究、及びジェンダー・セクシュアリティ研究という複数の視点からみて極めて重要であり、博士論文を視野に入れた今後の研究の考察の対象として不可欠であると考えられた。そこで、Split Britches の活動の拠点であるニューヨークにおける海外調査を実施し、上演に関する資料を、演劇作品のレビューを

中心に閲覧し、*Stage and Television*、*The Village Voice*、*Women and Performance* 等の記事(いずれも日本で入手不可能な分)から、Split Britches に関連する論文・記事を収集した。新聞記事に関しては、ニューヨーク公共図書館を中心に、また *Women and Performance* に関してはニューヨーク大学図書館にて調査を行った。以下の報告は、これらの資料を踏まえ、Split Britches の現代アメリカ実験演劇における位置づけと重要性を、今後の博士論文に向け、より明確にしたものである。

調査事前の考察では、おもに戯曲テキストの分析を通して、Split Britches の作品の特徴や手法、そこから浮かび上がってくる政治的戦略を検証していた。

Split Britches の活動に詳しい演劇研究者のスー・エレン・ケースが表現しているとおり、彼女たちの演劇は一言でいうなら「ポスト・モダン・スタイル」¹である。そこでは、ボードヴィルやキャバレーなど様々なショーの形式が組み合わされ、ユーモアでウィットに富んだ台詞やジェスチャーの中に、時事的な問題を反映する諷刺や、体制批判のブラック・ジョークなどが盛り込まれている。また、一見ほとんど合理性を伴わないプロット、度々交錯する空間や時間、目まぐるしく変化するロール・プレイングなど、作品の内容の面からみても、いわゆる伝統的な演劇作品からは大きく逸脱したものとなっている。

最大の特徴は、ほとんどの作品において見られるブッチ・ファム・ロール・プレイングという手法である。さらにこのブッチ・ファムは、「ロール・プレイング」であること、すなわち観客をリアリズムの世界に引き込むのではなく、そこにあるのが「演じられている」ものであるという意識を喚起するようなプレヒト的な理論に基づいて行われているということが、戯曲テキストの分析から推測された。つまり、このブッチ・フ

ファム・ロール・プレイングは、メタ・シアターという構造の中で行われているということが、戯曲テキストの分析から把握されていたのである。

Split Britches におけるブッチ／ファムのパフォーマンスは、文化的なステレオタイプとしての「男」と「女」をそれぞれ過剰に演じてみせ、その構築性を暴いていくという手法であるが、こういった「男」「女」というステレオタイプのほか、ハリウッド・スター（マーロン・ブランドやマリリン・モンローやヴィヴィアン・リーなど）などをビジュアル・イメージとして模倣したり、『若草物語』等の文学やシェイクスピアなどの伝統演劇、あるいは映画『欲望という名の電車』といった広く知られているソースを脈絡無く引用したりするなどし、様々な文化的アイコンやモチーフが、もともとの文脈や意味とは切り離されかつ断片化された形で多用されている。「男役」「女役」のジェンダー・パフォーマンスとしてのブッチ・ファム・ロール・プレイングに加え、このように様々なアイコンやイメージが次々と、役者たちによって繰り出されては消えていく。このような手法は、ミーガン・テリー率いるオマハ・マジック・シアターにおいて用いられたトランスフォーメーションという演劇手法を連想させるものである。同シアターの実践に詳しい池内靖子によれば、役者の身体を、様々な役が次々と通り抜けていくようなこのトランスフォーメーション・テクニクは、「人物と人物のイメージ、それに観客との距離を縮めたり、遠ざけたり、交差させたりしながら、幾重にもアイデンティティをずらしていく」² ことによって、既成のセクシュアリティやモラルを解体していくという効果を狙うものであるが、このトランスフォーメーションが多用されている Split Britches の作品も、同様の効果を持っていると考えることができる。このように、ロール・プレイングやトランスフォーメーションといった手法から推測されることは、「本物」らしさを強調して見るものの同一化を誘う演劇とは逆に、彼女たちが殊更に自分たちの「演劇性」を強調し（メタ・シアター）、プレヒト的な異化効果を狙っているということである。

また、ジェンダー及びセクシュアリティに関心を置きつつ、既存のアイデンティティの概念に挑戦するという意味で、Split Britches の実践は、同年代に隆盛した女性アーティストらによるパフォーマンス・アートに見るポリティクスと親和性を持つことができる。このことから、Split Britches は、80-90年代実験演劇というサイトにおいて、「女」をめぐる問題とアイデンティティの概念との問題を交差させ、規範的な言説に疑問を投げかける芸術の中にひとまずは位置づけ

られるという結論に至った。

ここまでの戯曲テキストレベルの分析から得た考察である。ただし、この段階では、資料は戯曲テキストを「読む」ことによるのみ行われたものであるので、これらの分析で導かれた考察が、上演において有効であるかどうかを確かめる必要があった。さらに明確な位置づけを行い、その中で90年代アメリカ実験演劇というサイトにおける Split Britches の独自性を検証することが必要となる。その際に、今回収集した資料が有効な手がかりとなった。上記の資料のうち、上演レビューを分析できたのは、Anniversary Waltz (1990)、Belle Reprieve (1991)、Lesbians Who Kill (1992)、Lust and Comfort (1995)、の4作品であり、これらはいずれも、前述した Split Britches の作品の特徴を多く備えている代表作である。観客そして批評家として、実際の上演を見た上で書かれたこれらのレビューは、テキストの分析のみでは知ることのできない重要な考察をもたらしてくれるものであった。それを大きく2つにわけて報告する。

(1) 「メタ・シアター」の前景化

成果の一つは、作品の戯曲テキストを読解するレビューの分析で見えてきたジェンダーやセクシュアリティに関する彼女たちのポリティクスが、上演レベルにおいても機能していたということが確認できたことである。上に挙げた演劇作品を実際に見た批評家の主たる関心は、やはりジェンダーを中心とした様々なロール・プレイングの手法にあった。彼女たち Split Britches のパフォーマンスを目の当たりにした批評家たちは総じて、上演中に見られるトランスフォーメーションの手法に触れ、さらに彼女たちのロール・プレイングが自己言及的（つまりメタ・シアター的）であったことを重要視している。観客は、舞台上に次々に繰り出されるイメージやアイコンを鑑賞するにとどまらず、それらがいかに演じられているものであるかということ、（時には役者自身による説明付きで）意識させられるのである。そして批評家たちはこのような上演形式が、ジェンダーをはじめとする既存の概念の構築性を前景化するものであると評価している。従って、戯曲テキスト分析の段階における、「Split Britches の実践の中心ではメタ・シアターという手法が機能している」という考察は、実際の上演テキストの分析に対する考察としても有効であるということが判断できる。このような結論は、博士論文全体を通して中心的なトピックとなる「身体」のポリティクスを考察する際に非常に重要なものとなってくる。既存の言説に対抗するた

め的手段としての芸術の在り方について考えるとき、演劇においてその中心的な役割を担うのは、表象の媒体としての身体である。**Split Britches**におけるこのようなポリティクスと、その媒体である役者の身体との関係を考察すれば、その中で問われている身体の新しい認識について考えることが可能になる。トランスフォーメーションとメタ・シアターという特性が前景化されることで、ジェンダーなどのアイデンティティや主体という概念の虚構性が明らかになるとき、役者の身体は、「男」や「女」をはじめとする多様なイメージが一時的に参照されるサイトであるという認識において呈示されるものとなる。それはまた、役者によって演じられる「役」と「役」とが一時的に取り結ぶ関係性の中においてのみ、初めて意味をもつものとなり、「身体」が様々な関係性に先立って存在するという既存の概念とは別の考え方を想定することが可能になる。このように、テキスト分析の段階での考察が上演レヴェルにあっても有効であるということを確認し、その上で、上演において中心的な身体という問題を考察することにつながる事ができたということが1つめの成果である。

(2) 政治性／エンターテインメント

二つめとして挙げられるのは、**Split Britches**の上演が行われた劇場での観客の反応から、彼女たちの作品がエンターテインメントの要素を大いに持っていたということがわかったことである。これらの作品のレビューのほとんどは、「笑い」や「楽しさ」に満ちた客席の様子に言及している。そしてそれは、ユーモアに富んだ諷刺的な台詞もさることながら、様々なイメージに早変わりしていくロール・プレイングが作るスペクタクルや、シリアスなテーマを扱いつつも常にコミカルに身体を使う（しばしば大げさで過剰な）役者たちの動作という、エンターテインメントとしての「演劇」の要素に起因していたようである。この点は、前述の彼女たちのポリティクス—すなわちアイデンティティや「身体」に関する既存の概念にラディカルに挑戦するといったポリティクスとの関連を考えると非常に興味深い。というのも、政治的には**Split Britches**と同様のアプローチを行っている女性アーティストたちのパフォーマンス・アートにおいては、このような「演劇」的要素はほとんど見られないからである。この点は、アイデンティティや身体の構築性を顕在化するポリティクスを共有する芸術実践の中で、**Split Britches**がどのような特殊性を持っていたかということに関するひとつの判断につながる。**Split Britches**と「演劇」、そし

てパフォーマンス・アートとの関係を考えてみると、そもそもパフォーマンス・アートとは、エンターテインメント的な「演劇」に対するオルタナティブな芸術の形として発展してきたものであるという事実に思い当たる。(例えば、代表的な女性アーティストであるカレン・フィンレーのパフォーマンスは、見るものに対して戦略的に不快感や嫌悪感を喚起するという手法をとっている。)とすると、「身体」や「アイデンティティ」の概念へのラディカルな挑戦という、ポリティクスの面では同時代の女性アーティストたちの実践と共鳴しつつも、その中で「演劇」という枠組みを否定せずむしろ利用し続けているという点が、彼女たちの実践のユニークさであるということができないのではないだろうか。**Split Britches**が、レズビアン・セクシュアリティの表象という試みの中に「スペクタクル」や「笑い」といったエンターテインメント的な「演劇性」を持ち込みつつも、批判性や政治性を失うことがなかったという点に、彼女たちの実践の独自性があるのではないだろうか。

この考察に至り、80-90年代におけるアメリカ実験演劇、とくに女性アーティストらによる芸術実践という枠組みの中で、**Split Britches**の位置づけをより明確に行うことができた。この点を、成果の2つめと考える。

以上の2点を、今回の海外調査研究の成果とする。これにより、**Split Britches**の演劇実践、特に上演におけるポリティクスと受容が明らかになった。今後はこれを、さらに広い文脈の中で論じる必要がある。博士論文は、アメリカ現代演劇及びパフォーマンスが、「身体」という問題をどのように扱っているのかを、ジェンダー、セクシュアリティ、人種をめぐる言説との関連において検証することを試みる。舞台芸術を分析し、演劇と社会の諸問題との関連において、権力構造への介入の可能性を模索する手段として身体を媒体とするものとして演劇を見なし、「演劇に何ができるのか」という問いに取り組むものであるが、**Split Britches**は、80-90年のフェミニズムをめぐる様々な問題の中でもとくに、レズビアン・セクシュアリティにフォーカスした実践を行ってきたユニットであるため、彼女たちの実践に関する分析は、舞台芸術と身体という問題を、セクシュアリティ（レズビアニズム）の側面から考察したものとなる。セクシュアリティの舞台表象に関しては、**Split Britches**以外のカンパニー（例えばゲイ・シアターとの比較）との比較考察を次の段階として予定している。なお、今回の成果として、**Split Britches**に関する考察は、レズビアン・セクシュアリティの舞

台表象と「身体」のあり方として独立した論文とし、『F-GENS ジャーナル若手研究者特集号』に研究論文として投稿する予定である。

注

1. Sue Ellen Case, *Split Britches: Lesbian Practice/ Feminist Performance*, p1.
2. 池内靖子『フェミニズムと現代演劇：英米女性劇作家論』p166.

参考文献

Case, Sue-Ellen. ed. *Split Britches: Lesbian Practice/ Feminist Performance*. London: Routledge, 1996.

池内 靖子『フェミニズムと現代演劇：英米女性劇作家論』田畑書店、1994.

参考資料

Blair, Rhonda. 'The Alcestis Project: Split Britches at Hampshire College.' *Women and Performance* 6.1 (1993):147-76.
Dieckmann, Katherine. 'Awwwww.' *The Village Voice*. 6 June 1995.
Eddings, A. *Women and Performance* 4.1 (1988):170.
Power, Sarah Mee. *Stage and Television Today*. 24 January 1991.
Russo, Francine. *The Village Voice*. 19 May 1992: 106.
Satin, L. *Women and Performance* 5.1 (1990):189.
Solomon, Alisa. *The Village Voice*. 19 February 1991:59-62.
Udovich, Mim. 'Brass Managerie.' *The Village Voice*. 5 March 1991.

さとう りの／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較社会文化学専攻
rinosato@k7.dion.ne.jp

【指導教員のコメント】

本海外調査研究は、日本では現在、入手不可の資料である 80-90 年代アメリカ実験演劇（とくにレズビアン・パフォーマーのユニット *Split Bitches*）の上演資料および演劇レビューを閲覧し、テキスト化された台本では把握しきれない当時の実験演劇の効果を調査・検証しようとするものである。演劇は実際に見ることが必要なのは言うまでもないが、すでに 20 年前後を経過した演劇イベントに対して、その具体的な衝撃力を探るには、上演された時の資料をつぶさに収集し、分析する必要がある。本研究調査は、当時のレビューや記事をもとに、80-90 年代レズビアン・パフォーマンスにおいて、「身体性」が前景化されていたこと、また政治性が「エンターテイメント」として表明されていたことを、観客の受容という点からも確認した。ともに今後、テキスト資料・映像資料の分析と連動させて、セクシュアリティの演劇空間のさらに総括的な考察として、博士論文の中に組み込まれるものと思われ、その意味で意義深い調査研究である。

（文教育学部 教授 竹村 和子）